

り返っていた。だが、人の気配はした。どの家からも、唸り声や荒い息遣いが聞こえてくるのだ。

(どうしてこんなことに……)

寝床に横たわる両親を見つめながら、アリュューシャは唇を噛んだ。

アリュューシャはもうすぐ十三歳となる。シャン族らしい小柄で敏捷そうな体つきの少女で、目鼻立ちのくつきりとした顔には強い意志がある。

めったなことでは泣かず、弱音も吐かない少女だったが、今は叫びだしたいほどの不安にかられていた。

病に倒れた両親を、アリュューシャはつきつきりで看病していた。だが、容態は悪くなる一方だ。二人は目覚める様子がなく、熱はますます高くなっている。今では、二人の息からは腐ったような臭いが始めていた。体の中が腐り始めているのだと、アリュューシャはぞっとした。

だが、なにより恐ろしいのは、誰にも助けを求められないことだった。

倒れたのは、アリュューシャの両親だけではない。シャン族の大人全員が、同じ病に見舞われてしまっているのだ。

(やっばり、秋水の儀式がいけなかったのかな?)

五日前の早朝、シャン族は秋水の儀式を行なった。

秋水の儀式は、鮭の遡上を願う祭りだ。秋、産卵のために鮭の大群が川をのぼってくる。その肉と卵は、冬を乗り

越えるためになくってはならない、なにより大事な食料だ。もし、川をのぼってくる鮭が少なければ、十分な蓄えを作ることができず、人は飢え、弱い者から死んでしまう。

例年以上に、シャン族は熱望していた。それというのも、今年はまだあまり食料を集められていなかったからだ。

ここ数年、この辺りには赤い山犬の群れが棲みつき、森を荒らし回っていた。おかげで、鹿や兎がめつきり減ってしまっていた。彼らは人も襲うので、子どもや女たちだけでは、おちおち木の実拾いにも出かけられない。

退治しようとしても、この山犬たちは悪霊のように狡猾で、手に負えなかった。逆に、狩人が数人、犠牲になってしまったくらいだ。

山の幸を望めない今、シャン族の命は鮭の遡上にかかっていた。その期待をこめて、一族総出で、秋水の儀式を行なったのだ。

身を清めたシャン族は、川の神に誓いの言葉を捧げた。偉大なる川神よ。どうかたくさん鮭を呼んでください。私たちにおいしい鮭の肉を与えてください。そのかわり、鮭がやってくるその日まで、私たちはあなたから魚をとりはいたしません。小さな沢ガニ一匹、傷つけはいたしません。

そのあと、巫女が川の水を大きな器に汲み上げた。

この時、アリュューシャの背筋に悪寒が走った。器から青